いの流水俳壇

松尾　満津於選

「当季雑詠」

秋祭り綿菓子売りは同じ場所　大川　節弥

（評）田舎の祭の多くは秋に行われる。村祭り、里祭り等恒例のもの或は季節に関係なく臨機に行う祭りもあり、賑やかだったが、今は随分催しの内容が変化している。出店、夜店も少なくなってその寂れ方は否めないが、綿菓子だけは同じように同じ場所。郷愁を誘う句である。

鯉跳ねて忍び寄る秋神の池　森元二美子

（評）今眼前に起きた情景である「跳ねて」には時間の、休止と経過が含まれている。池の鯉はいそがしく飛び跳ねる魚ではないが、餌（えさ）に在り付く気配を感じたのであろう。そんな神苑の池にもようやく秋が深まりつつある。

朝顔の百花連なる縺（もつれ）かな　片岡　包女

（評）朝顔は朝開くので朝顔という、と歳時記にある。この句は地についた諷詠である。

朝顔の咲く頃の朝は寒くなく暑くもないすがすがしい朝である。添え竹に巻きついて高く咲き登る朝顔、幾筋も縺れあう光景は美事で、無数に咲く姿はまことにすばらしい。

秋立つや杉の木立の風の音　森岡　照月

（評）杉の木立を吹き抜けてゆく初秋の風、静かな世界である。風のない世界は何も起らない、風が吹くことによって天地が動く。言い度いことを前（さき）に置く作句の方法を倒置法と言うが、例えば「今日は寒いネェー」と言うよりも「寒いネェー今日は」と、寒いことを先に置いて「今日は」を後につけた方が、寒いという印象を鮮明にすると思うが、この句の場合「杉の木立の風の音」でなく「風がささやく杉木立」とすればと考えるが如何であろうか。

母の夢子の夢合格祈願絵馬　間　浩一郎
新涼や楕円にひらく鯉の口　友草　水月
秋めきし筆の先より暮初（そ）めし　岡本とも子
神杉の蔭の深さや秋暑解く　刈谷　志津
参道を吹き抜く風や秋の蝶　井上　郁子
御神水清（すが）し日焼けの掌にそそぐ　津田　久美
松の芯伸びて宮司の竹箒　高橋　一人
四方より神域満たす法師蝉　岡村　嘉夫
みの虫に触れし木洩日なれば受く　東谷　晴男
一難の去りし安堵や爽やかに　竹崎　光子
爽やかや格子戸潜り伊野の女（ひと）　川村　博子
恋みくじ吉を信じて実る秋　門田　京子
庭を掃く巫女の箒目（ほうき）涼新た　宇賀　佳世
不規則に廻る噴水秋深む　川田　淑子
天高し路面電車のゆれ少し　中橋　京子
千年を湧き次ぐ清水神の池　島田　瞳
新涼の水おと韻く神の苑　川谷　節子
拍手に寄り来る鯉のさわやかに　橋詰登志子
暮れなづむみんみん蝉の名残かな　弘瀬うき子
名月を庭石に座して見上げおり　筒井　文
照り続く庭一面に柿も葉も　川村　愛
猟犬の鋭き眼（まなこ）秋深む　松尾満津於

次　題　「当季雑詠」
締め切り　毎月第2月曜日まで

投句先
吾北教育事務所　上八川甲2010
☎867―2133

今月のこども川柳

すずむしが　はねをひろげて　ないている
清水第一小1年　いとうりこ

おにぎりを　みんなで　食べる　おいしいな
下八川小2年　杉本みやび

ふうりんは　秋に聞けば　さびしいな
清水第一小4年　西峰　奨真

冬になり　母と布とんの　取り合だ
下八川小5年　甲藤あやか

秋風と　もみじがいっしょに　散歩する
清水第一小6年　伊東　邑晟